山陰における近世墓

中森　祥
（鳥取県教育委員会文化財課）

1. はじめに

山陰両県においては近世墓の調査例が多いとは言い難い。管見の限り、島根県は16遺跡、鳥取県では9遺跡にすぎない。このうち数基から10基程度がまとまって検出されている例と、50基以上の大規模な事例とがある。ここではとくに、まとまって近世墓が検出されている遺跡を中心に、墓壙形態、墓地形成、そして墓から出土する遺物について比較検討を行なっていく。

2. 墓地形成と墓壙形態の変遷（第１図５～７）

100基以上がまとまって検出されている清水大日堂裏古墓（安来市）、門前第２遺跡（大山町）、松原小奥遺跡（鳥取市）をみると、いずれも16世紀代（後半以降）に造墓が開始し、近現代まで墓地として営まれている。その在り方をみると、門前第２遺跡でははじめ丘陵の西縁部に列状に展開するが、その後18世紀（Ⅱ期）になって東及び南側を溝で区画し、その中で造墓されるようになる。そこでは必ずしも規則的な配列は見いだせず､切り合いも甚だしい。松原小奥遺跡もⅠ期（16～17世紀）からⅡ期（18世紀代～近世末）への墓壙形態および配列については同様で、やはりⅡ期以降の規則的な配列はない。一方清水大日堂裏古墓ＡⅠ区西（80基）では、各墓の切り合いがほとんどない整然とした配列である。細い丘陵上を平坦につくりだし、東・北・南の各辺は溝はないものの、ほぼ直線的に区画されていることが看取できる。また半坂古墓群２区では、丘陵中央部にある古墳状高まりの裾部周囲に弧状をなして墓が連なるという特殊な配列をしている。いずれにせよ、18世紀になって墓数が増加することについては共通し、墓域の形成には地域的な特色が現れてくることが考えられよう。

墓壙形態の変遷について松原小奥遺跡では、Ⅰ期には長方形で長径－短径比が概ね４：３（ＣⅠ型）の墓壙がつくられる。このタイプは続くⅡ期にも若干あるが、径の長短比が小さくなるＣⅡ型が主流になっていく。またこれはＣⅠ型に比べ深いものが多い。そしてⅡ期になると､方形（Ｂ型)､円形（Ａ型）墓壙が出現し主流となり、前者はそのままⅢ期（近代以降）以降も継続する。この傾向は門前第２遺跡も同様であるが、ここではⅡ期について18世紀中葉～後葉、19世紀代の２時期に細分され、Ａ・Ｂ型が19世紀代から主体となることが判明している。またＣ型については深浅２種があり、前者がⅠ～Ⅱ期に主となるのに対し、後者はⅡ期後半から出現する。浅いタイプは松原小奥遺跡では確認されず、地域的な差異が看取できる。

3. 墓壙内出土遺物の様相

20基前後以上の墓が検出された遺跡において､墓から出土する遺物の出土（副葬）率についてみると、古市遺跡（鳥取市、14.4％)、板屋Ⅱ遺跡（飯南町、20％）が２割以下と低く、続いて５割前後の遺跡として田住桶川遺跡（南部町）などがある。大塚岩田遺跡（大山町)、石州府古墓群（米子市)、陰田古墓群（同)､清水大日堂裏古墓の４遺跡では65～70％とかなり高い。陰田古墓群はＡ群（17世紀前半）は36.0％と低いが、Ｂ群（18世紀以降）では84.2％と非常に高率になる。またＡ群とほぼ同時期の谷ノ奥遺跡（松江市）では28.6％となっておりやはり低い。出土率が５割以上の諸遺跡がいずれも18世紀以降に比定されることから、この時期から副葬品をもつものが増加する傾向が窺えよう。

筆者は山陰両県の近世墓から出土する副葬品の組合せを検討し、銭貨・刃物類・煙管という３点が基本的なセットとなる可能性を指摘し、それを死出の旅立ちのための「トラベル・セット」と規定した（中森2008、第１図３・4)。こうしたセットは鳥取県西部（伯耆特に西部）において顕著に見いだ

せ、これに、西接する出雲東部と隠岐では、やや類する傾向が見て取れる。一方、鳥取県東部（因幡）では古市遺跡、松原小奥遺跡併せて400基を超える墓が検出されているにもかかわらず、非常に副葬される率が低い。また、出雲西部から石見にかけても因幡同様、副葬率が低くなっている。

検出事例の多い西伯耆のうち門前第2遺跡では、銭貨が出土する事例は検出数の半分以上を占める。2点セットでは銭貨と刃物、銭貨と煙管がそれぞれ10例ずつ、3点でも銭貨・刃物・煙管のセットが10例ともっとも多く、この3点を基本としていることが窺える。また2点セットでは1例しかなかった毛抜が、3点では6例、4点のうちが1例と副葬の費目が増えるにつれてそこに組み込まれている。この遺跡から直線で2.5kmほどに位置する大塚岩田遺跡では、銭貨と刃物のセットが多く（16例）、これを含め2点セットが26例（30.6%）と主体となる。一方3点セットの事例が3例（3.5%）と少ない。両遺跡の副葬品は同じような構成であるので、概ね同様の習俗を有していたと考えられるが、各セットにおける事例数の多寡はそれぞれの集落の性格を反映した可能性も考えられよう。こうした3点以上をもつものは門前第2遺跡で17例（12.9%）であったが、陰田古墓群では9例（23.7%）と割合が高い。特に、先にみた4点の組合せが5例もあり、このセットが強く意識されているといえよう。また、同遺跡は銭貨のみの事例も12例と多いが、一方で2点セットが4例（10.5%）と少ない。このことからも4点ないし3点セットを、副葬品の一つの基本としていたといえる。

出雲において3点以上のセットは半坂古墓群で3例（5.4%、うち4点セット1例）、清水大日堂裏古墓群で1例（1.0%）しかない。他に前者では2点セット3例、銭貨のみが8例となっており、全体として副葬品は乏しい。後者では、3点が1例あるのみで、4点はない。しかし2点のものが13例（13.0%）とやや多く、大塚岩田遺跡と同様な傾向が窺える。さらに、東出雲から西にある各事例も2点セットがせいぜいで、銭貨のみを入れるものが主となっているが、それも石見ではほとんどみられなくなる。以上、大変雑ぱくにその様相をみてきたが、「トラベル・セット」としたものをもつ事例は西伯耆から東出雲に限られ、さらに、各墓地群の性格によって異なってくる可能性がみえてきた。

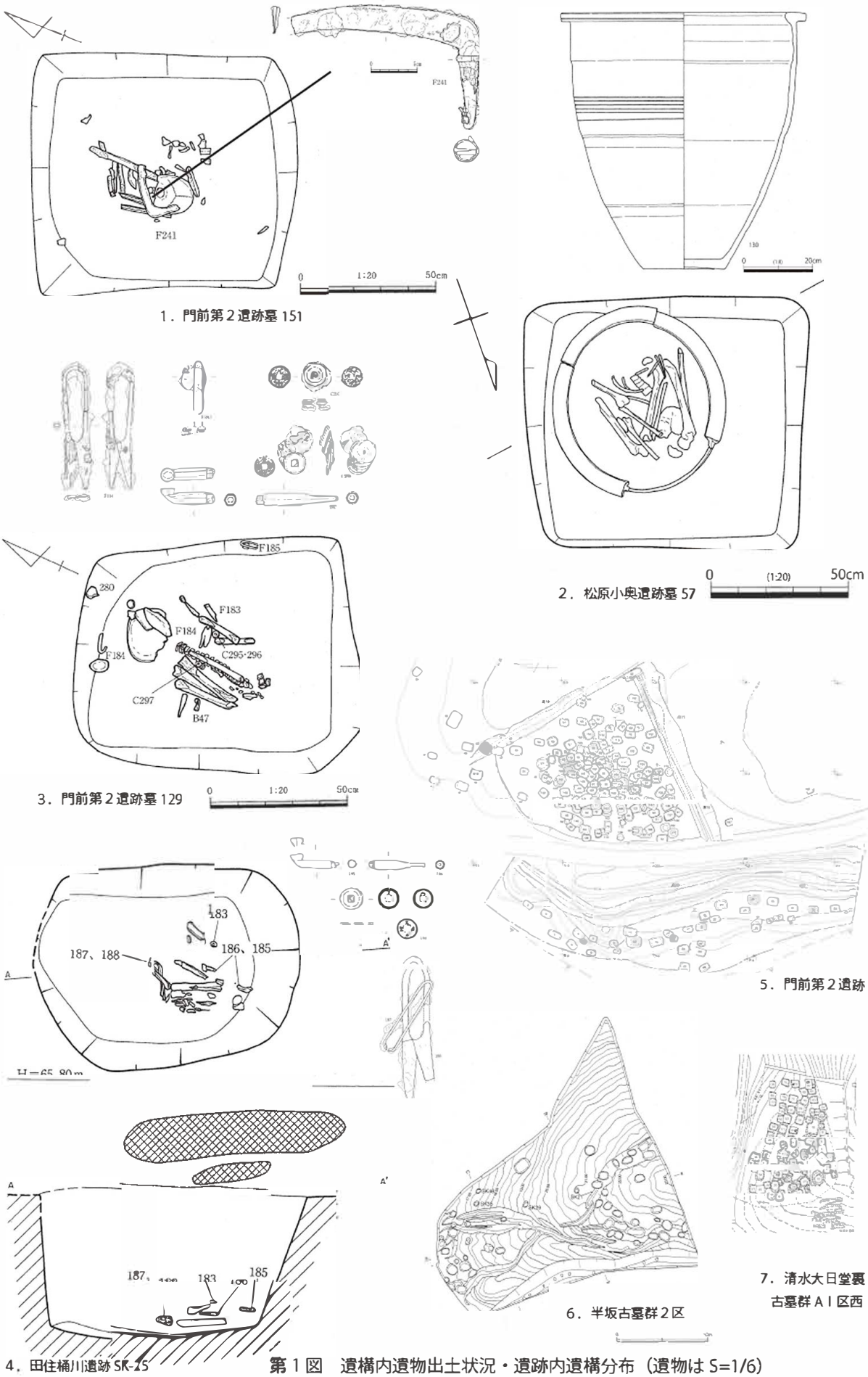
こうした副葬品の埋納方法を西伯耆における民俗事例にみると、納棺の際死者の首から頭陀袋をさげ、その中に六道銭や経文、生前の愛用品を入れたり、六道銭の穴に紐を通し、首からさげるなどしている。同様なものは東伯耆でもあり、生前の愛用品の他、六道銭を棺内に入れたという。また、門前第2遺跡で鎌の出土が顕著であった。墓内埋土上位や頭蓋骨上に接着するような状態で出土する（第1図1）ものが多く、少なくとも銭貨や煙管などとは異なり、遺体より上位に置かれていたことが想像できる。実は、現在も墓上の標石横に鎌の柄を地面につきたて、刃先を外側に向ける事例があり、この習俗が近世まで遡ることが裏付けられた。

4. おわりに

以上、ある程度まとまって検出された事例を中心に、山陰における近世墓の概要について検討してきた。墓壙と埋葬形態の変遷の関連性や、副葬された品々のセット関係など、ある程度共通するものがある一方、副葬品や品数の多寡、因幡における越前焼などを用いた甕棺（第1図2）や棺内に稲藁を敷き詰める事例など地域的な特徴も窺える。また、現代にまでつながる墓制の様相に関わる材料があることがわかり、今後さらに民俗学的な事例も踏まえながら検討していくことが必要であろう。

【引用・参考文献】（各報告書は割愛した。）

北　浩明・中森　祥 2007「中近世墓群の考古学的考察」『門前第2遺跡Ⅱ（菖蒲田地区）』鳥取県埋蔵文化財センター
坂田友宏 1995『神・鬼・墓―因幡・伯耆の民俗学研究―』米子今井書店
中森　祥 2008「トラベル・セットの成立－山陰における近世墓の副葬品から－」『出土銭貨研究』第2号
中森　祥 2010「松原小奥遺跡中近世墓の様相とその位置づけ」『松原古墳群Ⅱ・松原小奥遺跡』鳥取県教育委員会
中森　祥ほか 2012「山陰の近世墓出土銭貨」『宮田進一氏追悼集』出土銭貨研究会・北陸信越出土銭貨研究会



1．門前第２遺跡墓 151

2．松原小奥遺跡墓 57

3．門前第２遺跡墓 129

4．田住桶川遺跡 SK-25

5．門前第２遺跡

6．半坂古墓群２区

7．清水大日堂裏
古墓群ＡⅠ区西

第１図　遺構内遺物出土状況・遺跡内遺構分布（遺物は S=1/6）